

平成 21 年 7 月

せつかちに流るる春の水なれば
絶叫をかたちにすれば鴟の贅
せはしさのつんつんのめる十二月
先生にぎゆつと抱きしめられ卒業
仙人の食ひ残したる霞かな
先発登板今年も櫛の初紅葉
煎餅を糞に加工の奈良の鹿
相対性理論銀漢の果てにある
走馬灯出会ひ別れをくりかへし
ソロにはじまり虫の宿のコンサート
ダイエットの敵と休戦バレンタインの日
大辞林割り啓蟄にたどりつく
たうとう倒れ良く回る木の実独楽
竹の子といへどもすでに毛むくじやら
出してすぐ居間の主役になり炬燵
楽しくはあらずダイエットの縄跳びは
大根洗ふ流れの水の無尽蔵
男女交際炬燵の中の脚四本

単身や布団の暗き穴に入る
探梅の一句や穢れなき白の
竹林と春の蚊の刺す竹の秋
父の日の吾は父なり且つ子なり
着地点さがすかに舞ひ風花は
長短のあり流燈の寿命にも
蝶々のやすやすおのが手をぬける
鎮火する気配のなくて曼殊沙華
突き抜けるとき陽炎の無抵抗
継ぎはぎシャツに満足顔の案山子さん
常に前向き案山子てふ奴は
艶々として堅物の椿の実